

形正しければ影曲らず

対談者 田覚寺派管長・朝比奈 宗源

三木内閣の大蔵大臣時代の対談であり、洋の東西、過去・現在に話題を求めて、政治と宗教を中心に日本人論、日本文化論を自由奔放に語り合っている。朝比奈禪師は昭和五四年に死去。

レーニンは偉大な実践家だった

朝比奈 あなたはまだ若いんだらう？

大平 いやいや、もう六十六です。

朝比奈 でも、わしと二十違う。わしは昔流にいうと八十六、満で言うと八十五だ（笑）。ロシアの革命が起こったのが、もう六十年前になったね。あのころは私も若かったし、ずいぶんロシアのことに興味も持ったし、心配もした。わしはレーニンを非常に崇拜してね。あの人は人柄がちょっと乃木（希典）さんみたいで、非常に己に奉ずること薄く、厳しく、それで他人には寛容で、ともかくもケレンスキーなどがしくじったあとをまとめた人だからね、実力もあると思った。そんなことだね。

安倍能成さんが、まだ慶応の哲学の先生だったころ、私が最初に鎌倉で持った貧しい禅寺へひよこりと来たことがある。暗い部屋の私の机の上に、レーニンの小さい写真が置いてあった。それを見て「ありゃ」と言うから笑っていたら、「レーニンじゃないか……ふうん」とうなっていた。あとになって彼もちよつと偉くなつてから、「鎌倉の朝比奈さんの部屋でレーニンの写真を見たときは驚いたよ」と、何べんも言っていた。彼も、文部大臣をしたり、学習院の院長もしたが、亡くなつてしまつたな。

大平 そんなことがあつたんですか。

朝比奈 あんたも額にしわがあるな。わしは三十ぐらいからあつた。だから、わしが袈裟をかけて、威厳を少しくつて撮つた写真を見ると、自分でも全く驚くほど、レーニンとよく似ている感じがしたんだ。レーニンというのは、わしのような三角の貧相な顔だからな。そのくらいなのに、最近発表されたアンドレイ・サハロフの『わが祖国』 原名は『わが祖国と世界』だが を読むとがっかりするな。人間のすることというものは、しようがないものだな。

大平 レーニンの伝記が、このごろたくさん出るようになりましたね。それを読んでみますと、レーニンという人は大変な実践家だと感心しますね。

朝比奈 うん、彼は実践家だ。

大平 あれがたいいていの人だったら、途中で挫折して、もう革命をやめてしまつておると思いますね。ところが、あの人は最後まで捨てずに仕上げた。そのやり遂げた実践力というのは大変なものだと思いますね。

朝比奈 私もそれを買うね。何て言つたつて、理論だけじゃ本物にならんわな、あすこまでやつて

みなきや。しかし、レーニンも地下でがっかりしているのじゃないかな。あれだけ彼が苦勞してやっても、結果がサハロフの書いてるようだとね。あれは歴史の大きな教訓だよ。日本人はとかくおつちよこちよいで、惚れやすく冷めやすいところがあるんだが、それとちよつと違つかもしれないが、我々の若い時分には、よく青年時代に社会主義にかぶれないようなやつはほんくらだ、三十過ぎてもやっているのはどうだとかいうようなことが言われたね。わしなんかでも、初めはかなりシンパ的な氣持があつたが、年とともにだんだん冷靜に見るようになった。

名君は賄賂を厳しく自戒する

大平　そうですね。日本でもこのところ、そういうことに対する見方が大変肥えてきましたね。今度、ロッキード問題が起きて、野党の皆さんが、これは構造的な汚職だ、保守政権にまつわる、また、アメリカと日本とを巻き込んだような構造的な汚職だときめつけている。けれども、日本には自由があり民主主義が発達しているから、ああいう問題が起こると、摘発され国民世論の批判を受けることになる。これが一部の者が権力を握り自由な批判を許さない国だと、體質的に構造的汚職が発生する土壌を持ち、また、いったんそういう問題が起こっても知らされないままに蓋をされたり、自由な批判を許さないということで、ますます腐敗を培っていくということになる。そういう意味でも、自由というのは非常に大切なことで、民主主義を健全に育成していく基本になる。日本の現在の制度ややりかたは、腐敗を絶えず摘発し、浄化していくものだと思いますね。

朝比奈　そういう意味では、東洋は西洋より清潔だと思つんだね。東洋でも専制主義の国家におい

ては、当局者の権力というものは、今の全体主義国の首脳部に劣らないくらいのもはあつただろうが、賄賂をいかに戒めたかというのは、例えば中国の古い時代だが「苞苴ほうしよ盛んなるか」と言つて、自分の政治の間に賄賂が行われているかどうかということを厳しく責めている皇帝がいる。権力の座にある者は、下の方のおべっかや賄賂を非常に自戒している。これはもう名君とか、賢臣とか言われるような人の基本的な道徳だった。日本の官僚は清潔だと思つが、常に身边には氣をつけ、自戒の心を失わないでもらいたい。

大平 確かに東洋と西洋とでは、だいぶ感覚も違つてしょうね。

朝比奈 アメリカあたりじゃ、コミッションとかいって、一億の取引をすりゃ、五百万や千万はやつても当り前だというようなことらしいじゃないか。

大平 日本では、普通の社会生活においても商慣行においても、チップとかリベートとかコミッションとかいうようなものが殆どなかった。そういう日本語もないんじゃないでしょうか、全部外来語です。ところが世界が狭くなり、だんだんそういうものが日本にも普及してきた。そこで健全な庶民感覚からいって、そういうものがどこまで許されるかということが問題になるが、その判断は実のところ非常に難しい。庶民感覚の許す範囲内できちんと節度が保たれておれば、そのことは社会生活で潤滑油になる面もあるでしょうが、これが度を越して、しかも慣行化してくると、それは問題でしようね。

朝比奈 私が若い時、こういうことで失敗したことがある。それは、あるアメリカ帰りの女性が、私にお礼をするつもりで裸で金を出したんです。人から裸で金をもらったことなんかなかったから、わしは内心失礼だと思つてね、困ると言つて断つた。そうしたら、自分を侮辱したといつて、その人

が腹を立てたのには、わしは驚いたね。その人は有名な人の妹さんだったが、やっぱり習慣の違いだということをしみじみと感じたね。

大平 同じ東洋の国でも、日本では、残念ながらロッキードという問題が起こっていますが、よその国と比較すれば清潔だと言われますね。私が外務大臣であったときに、ある東洋の国の要人がこられて、日本という国は非常にうらやましいと言つたのです。どこがうらやましいのですかと聞いたたら、公務員が清潔だと言つたんですよ。

朝比奈 そりゃそうだろうね。

大平 彼が言うには、日本の国が今日あるのは、結局、公務員のモラルがこのようにきちんとしておるからだと言つたのです。だから、薄給に甘んじてきちんとやっている公務員を大事にしていたきたい。私の国は、どこから手をつけていいのやら、上から末端まで汚染されてしまっていて救いようがない。全く日本がうらやましい、と言つたんですよ。

あるべきよつは、と七文字の仮名

朝比奈 そういう日本的な道徳的伝統は、官僚の訓練でも、まあ平安朝のことは知らないが、鎌倉期からあとはかなり組織立ってやっているからね。鎌倉期というのは、そういう意味でも大した時代だと思つね。例えば北条泰時だが、彼の儉約、綱紀の肅正は立派なものだね。執権はいわば総理大臣だが、それでいながら、四人かでやる宿直を三十年間、怠らず自らきちんとやった。また、一つの帽子を三十年間かぶるといふくらいに、彼は質素な生活をしていた。

泰時についてはこういう話がある。父の義時が死んだときに、その遺産を全部きょうだいに分けてしまつて、自分は少しも取らない。それで、伯母の政子が心配して、「おまえは執権として立つのに不自由じゃないか」と言つて注意したら、「いいえ、私は何十年も部屋住みでやつてきたので、私生活は充分に足りません。父も、死んだあとときょうだい達のことを案じたと思つから、私はできるだけ彼らにやつたんだ。私が入用となれば、それは天下のために入用のときだ。天下のために入用のときは、天下の富を挙げて使うから、あなたのような心配をする必要はない」と。今で言つたら、公的に必要なことは国の予算でやるからいいということだが、こつこつ立派な態度で処していた。

大平 政まつらに当つては、全くそつこつ態度で処することが必要ですね。いま自民党は、ロッキード問題で国民の疑惑や批判を受けているわけですが、こつこつときには全員が裸みそぎ（罪やけがれをはらうために川などで水を浴びて身を清めること）を受けるような気持で、国民の信頼を回復することが必要だと思つてゐるんです。

朝比奈 そう、そこで泰時は、川端康成君がノーベル賞を受賞したときに引用した梅尾の明恵上人の教化を受けた人ですが、あるとき明恵上人に「私は将来天下を支配しなければならぬが、何を心得とすべきか」と尋ねたら、上人は「欲を去れ」と教えた。泰時が「私はやれましようが、下の者までそれをさせることは……」と心配した。そつしたら明恵上人の言葉は、「形正しければ影曲らず」と、上に立つあなたがきちんとすれば、下はついてくる、そんなことを心配する必要はないと言つたんですね。実に明快なものです。それから「あるべきよは」といわずか七文字の仮名で、お互いがあるべき姿を守ればいい、そつすれば必ず天下は治ると書いて与えたんです。それを実行したのが、鎌倉幕府の基礎を固めたあの時代ですね。のちに元が攻めてきた時、時宗が戦つて勝つたけど、それは

みんながそういう姿勢で政治をやって、あの時代の国民の支持を深くとらえていたからですよ。だから、あれだけの難局を乗り越えられたのですよ。やはり上に立つ者には、そういうことが一番大事だと思ふ。正直に、また、できるだけ質素にね。

大平 全く同感ですね。私は外務省や通産省、大蔵省と大臣をつとめてきまして、まず何を見ていたかというところ、私どもは毎日限られた幹部にしか会えません。各局に責任を持っている局長、部長、そういった諸君に会うわけですが、その人たちの顔をじつと見たわけです。そうして、きょう彼は非常に明るい顔をしている、何にも屈託のない陰りのない顔をしている、そこでああこの局は大丈夫だ、うまくいっている、そういう見当をつけたんです。

朝比奈 それはいいことだ。

大平 今まで私は各省を回ってきましたけど、大体、日本の役所は明るいですよ。暗いところがない、その点是有難いと思つていますね。

朝比奈 そうだろうね。それがロッキード事件みたいなことが発生していたら、そうはいかない。

「日本人は死んだ」のか

朝比奈 ところで話とはぶが、最近政府の方でも関係が深くなっているアラブの国、あそこはマホメット教なんだが、このころ私どもの方へも連絡をしてくるんだよ。彼らは明快なことを言つね。我々のイメージに合う尊敬すべき日本人は、今のようない日本人じゃない。明治維新当時の、二千年遅れていた国をわずか百年足らずで追い着き追い越せとやった、あの意地のある純粋な日本人だと。し

かるに今の日本人は、もうそういう日本人じゃないと。イスラエル系のトケイヤー氏が最近書いた『日本人は死んだ』という日本の思想や教育についての本を見て、明治維新を築いたような日本人はもう全部死んだと言っている。私は、今の状態では、そう言われても仕方ないと思う。ともかく今の日本人は甘いですよ。あなたもお読みになっただろうが、イザヤ・ペンダサンが書いた『日本人とユダヤ人』という本の中でも言ってますね、日本人は過去があまり恵まれ過ぎて根性が鍛えられる時がなかったから、全部甘いと。これが実につらいけれども、当たっていると思う。

今の日本人は、政治思想、イデオロギーの問題を实にあいまいにしています。この非常に重要な原理原則をはつきりさせないと、政治だつて安定しませんよ。日本の国で共産主義を国是とするのがいいか悪いか、ということすらはつきりさせていない。お互いに相手がなんだかよく分らないでもって足のひっぱり合いをしているような、こんなことをやっていたつてしょうがないな。日本人が甘いと結局日本人がそれが何か分らないうちに、いろいろな外国の思想につけ込まれますよ。何が日本人にとって最もよいかという、原理原則はつきりさせなきゃいかん。

大平 やっぱりキリスト教国にはキリスト教という譲りがたい原則があるし、アラブの世界はアラブの世界で、毎日、時間が来たら何を犠牲にしても礼拝するような譲りがたい原則を持っていますね。どこの国もよって立つ原則がきちんとしているが、日本はいまご指摘のように原則を見失っていると思う。日本人は、ええじゃないかええじゃないかで、安易な妥協をするところがある。対内的にもそうだし、対外的にもそうで、バックボーンのないくらげのような国になってしまったところがありますね。国がよって立つ基本がはつきりしていない、嵐に耐えてこれが日本人だと示すものを持っていないということですね。これは、おっしゃるように、えらいことだと思えます。今から原則をもつて

度見直す、我々の先祖が持っているものはいったい何だっただろうかということを見直して、よいものを発掘して、これを世界に顕示し、我々がそれをきちんとして生きていくことをしなければいけない。今は、そういうことが一番大事な時ではないでしょうか。

二度にわたるパチカンの決定

朝比奈 私は宗教家ですから、ちよつと宗教の話をする、仏教という因縁という法則ね、これは一口で言えば、全部が条件によつて変化するという考え方で、実は極めて科学的な思想なのです。これによれば、日本がこのようになったのには、そうなるだけの条件が内面的にも外面的にもあつたわけで、我々一人一人が特別に責任を持つことはできないですね。できないが、しかし、また一人一人が自覚する以外にない、この点ですよ。いま日本人の若い方々が日本の進路をどうするかというのには、結局二本の道、つまり自由主義の路線を貫くか、進んで専制主義ないしは全体主義の道に入っていくかという、この二つの選択になると思う。これは、非常に重要なことですよ。ここに日本人の自覚がかけられる。

私は、日本のいろいろな宗教団体と一緒になつて平和運動を進めています、カトリックもこれに加つていますね。四年ほど前に平和大会を伊勢で開いたときには、パチカンの駐日大使もローマを代表して、初めて正式に日本の宗教の集りに参加した。そんなわけで、我々は仲間のようになっているわけだが、我々の共通の認識はね、世界は結局、宗教を全く否定するイデオロギーと、宗教を肯定するイデオロギーと、二つに分れて対立しているといつことです。

今から十一年前に既にローマではパチカン会議で、九百十一年間も絶交しておったギリシヤ正教とローマ教会が握手した。そして、オール・キリスト教で共産主義対策を練った結果、カトリックの信仰をもってすれば、共産主義もやがて抑えて融和できるという自信を持った。大した信念だ。私の近くに鈴木大拙さんが住んでいました。私がこの情報を聞いて、「えらいことをローマは決議しましたよ」と言ったら、「本当か」「本当です」「そんなことをしてカトリックがもつかなあ」と心配していた。だが、それから法皇は二代代っています。この二代とも一生懸命、国連へ行って平和講演をして歩くような人達です。この十年間に、カトリックはどんなイデオロギーとも共存しようと随分努力してきた。しかし、昨年の暮にローマはついに腹を決めている。日本の新聞はあまり伝えませんでした。昨年の秋、南ベトナムで大変な数の宗教者が死んでいる、仏教も、カトリックも、ほかの宗教も。行方不明が二十五万人とか言われている。

そういうことがあったからだと思いますが、昨年の暮には第二回目のパチカン会議をやつて、十一年前の決定を取り消して、一人の人間がクリスチャンであると同時に共産黨員であることは、絶対に不可能だ、という結論を出した。もうだめだ、妥協はできないということで、対決を決意したんです。

そこで、十字軍以来千年近くも争っていたマホメットとの間も、全面的に宗教を否定するイデオロギーが出てきている以上は、我々が兄弟で争うのは愚劣だ、手を握ろうと。二月一日から六日まで、ローマの代表十四人とマホメットの代表十四人が一堂に会して討議して、二十六か条の協約みたいなものをまとめて、宗教連盟のような準備をしている。この二十六か条に対して、ローマでは二か条だけ少し待ってくれと言つて、大体は合意したらしいです。

自由を奪われて自由の尊さが分る

朝比奈 宗教の話は別としても、日本人にはベンダサンが「日本人は安全と自由と太陽と水とは、只だと思つてゐる」と言つてゐるような甘さがあるから、全体主義とか専制主義的な思想の攻勢に対して認識が甘いし、もろいところがあるのでしょね。

大平 うーむ。私はね、日本人が原理原則に弱く、古い日本人は死んだと言われているようなところはあるけれども、しかし、日本人はそんなに脆弱な民族ではないと思つてゐるんですよ。そういう日本人に対して、日本の各政党もいろいろと対策を考えてやつてゐるわけでしょうが、日本人は大きな歴史の流れの中で、結局は正しく判断して行くにちがいないと思つてゐるんです。

朝比奈 はじめにもちよつと言つたが、サハロフが最近書いた『わが祖国と世界』ですね。あれには全くわしの腹にこたえるようなことがいろいろと書いてある。あんたも読むといい。結論を言つとね、サハロフは自分の祖国はまことに悲しいことになつたと書いてゐるんですよ。いま権力の下敷きになつてゐる下層民は、その苦しみを訴えるところがない。その苦しみは、王朝時代の比じゃない。思想の自由を認めるの、表現の自由を認めるのと言つても、信用できないと言つ。このような宣伝に自由主義の人達がうっかり乗つてもらつては困る。自由主義では、みんな意見をもつて自由に発言しているから意見の一致が容易でないが、どうか自由主義の立場だけは結束して守つて欲しい、それが人類の将来に光明を失わないゆえんだから頼む、と言つてゐるんですね。そして、彼がその一行一行を書くのにも命を懸けてゐることを知つてくれ、と言つてゐる。

ソ連から追放されたノーベル賞作家のソルジェニーツィンも、自由の尊さは自由を奪われ収容所に入れられた国民でなければ分らない、と言っていますね。だから、我々はよく目を見開いて真の自由主義を守っていく決意を持たなきゃいけない。

多彩なオーケストラのような政治を

大平 本当に、自由の尊さということを日本人はもつと自覚しなければいけないですね。私はさっき日本人はそんなに無原則でも脆弱でもないと思うと言ったのですが、いま日本の各界では、日本における原理原則というかユニークな日本のものとは何だろうか、ということの発掘が始まっていると思うんです。例えば政治の世界でも、日本の政治はどういう原理原則でやってきたんだろうかということ、「いえ(家)」中心の考え方などに焦点を当てて、学者を始めいろいろな人が日本の歴史を通じて発掘を始めていると思うのです。日本の経済でも、単なる合理主義かと言うと合理主義以上の何が日本の経済思想の中にはあるのではないか、というようなことをみんなが勉強を始めているし、そのほか多彩な文化の世界でも、一概に捨て去ることのできない貴重な遺産があると思いますね。

そういう中で、いま老師がおっしゃるように、全体主義とか特定のイデオロギーの攻勢があるわけですが、それでは、それに対して日本人の抵抗が非常に弱くて、朝に一城、夕に一城と落されているかと言うと、私はそんなに日本人がもろい民族であるとは思わないのです。自由主義とか民主主義というのは、本来その中にあらゆる思想なりイデオロギーを包含し、消化し、自由な討議を通じて、健全な国民の選択を重ねていくものです。時にはがゆいと思われることがあっても、終極においては私

は日本人を信頼しているのです。特定の価値観を持った調子の高い主張を一方的にがむしやらに押しつけようとしても、日本人には何かそのようなものを拒否する精神があるんですね。私は、やっぱり政治というのは単調な音楽で片づけるのではなくて、多彩なオーケストラのように、いろいろなものを組み合わせた重畳感を持った、しつかりとしたものでなければならぬのではないかと思つたのです。そうして、それをどういふふうにして出すかに苦心していくものではないか、と思つたのです。

その際、みんなでもう少し自信を取り戻して、我々の文化的土壌の中にあるよきもの、値打ちのあるもの、強いもの、そういったものをもう一度発掘し、それを誇りにし磨き上げて、子孫に伝えていくようにしないといけないのではないか。また、そういうことを現に嘗々としてやっている諸君は多いわけですから、そういう人達を励まし広めていく気風を各界で起こしていきたいと思ひます。

青年に個性と面魂、義務と責任を

朝比奈 確かに日本民族はよい面を持つている。世界に例のない二千年の平和な歴史を持つ日本です。わが国民の理性的鍛練の不足からくる根性の甘さは悲しいが、その一面、人のよさ、純情で他人と自己との区別を忘れるような童心、若々しさなどは、他の先進民族には見られない特徴で、ひいき目に見れば民族そのものの若さでもある。若さには未来があり、過つても改め得る可能性を大きく持つているからね。しかし、私は最近の風潮を見ると、経済の高度成長の波に乗つて起こつたのかどうかは知らないが、生活は贅沢に、風俗は華美になり、わが国民の長所とされた質実剛健の風などを払つて尽き、殊に青少年の精神面の懦弱化には絶望的なものすら感じる。

昔からその国の青年を見ればその国の将来を占うことができると言うが、現在のわが国には、個性的な風格と、いかにも氣力の漲みなぎった立派な面魂おもてたまを持った青年が本當に少ない。これは社会に対する義務や責任の觀念、公共的なものに奉仕する精神などを全く教えない戦後の教育方針の弊害が大きいと思ふ。具体的に言えば、戦前に教えた誠実とか、信義、義務、謙虚、節度、勇氣、博愛といった道徳を再び取り戻し、今日の自由主義や民主主義をはきちがえたエゴイズムの、放縱の生活を百八十度轉換して、自己規制をもつと厳しくすることが必要だな。

大平 国家に対する義務などと言うと今の若い諸君は嫌うでしょうがね。しかし、中国やソ連の教科書には、むしろ明治の教育勅語と同じような、祖国愛とか勤勞の尊重とか、勇氣、親切、報恩とかいった道徳がはつきり示されているようですね。

朝比奈 アメリカでもフランスでもみんな同じですよ。日本だけが何も主体性のないものになっている。だから、わしは戦後の教育を奴隷教育と言うんだ。個性的な心のある青年を育てないようになっているとしか思えない。しかし、結局は指導者ですよ。要するに指導者に毅然とした精神が失われ、国民の精神が萎しなびているんだな。例えば石油ショックの時もそうだと思う。日本は石油ショックに襲われたつて相當の経済的實力を持っているはずなのに、まるで「右や左の旦那さま」ときよるきよるしている乞食こじきのような態度は何だろうね。

より高い連帶価値に向かつて

朝比奈 日本の最近の精神的風潮を見ると、ともかく今後の日本を滅ぼすも救つても今だと思つ。

大平さん、あんたもこれからの日本を引張っていかなきゃならん人だ。お願いしますよ。どうかひとつ腹を据えてやって下さい。わしはどうも口舌の徒にとどまる人物は信用できない。やはり信念を持つて実行する人物でなきゃ。

大平 いやあ、どうもだいぶ叱咤されましたな（笑）。私はかねてから、今のような平和と豊かさの中に、分別を持った連帯感の横溢した人間をいかにしてつくり上げていくかということが、政治の最大の課題であり、教育の基本的任務でなければならぬ、と考えているんです。そのためには、自他に対する甘え、無気力、無関心、絶望あるいはエゴイズムを退け、より高い連帯価値に向かって、我々の内なるエネルギーを引き出すことであると思っております。

わが国民は老若男女を問わず、社会的な価値の創造に参加し、真の生きがいを見出したい願望に駆られていると思つんです。特に青年は常にそのような自己の実現の機会を求めていると思つんですよ。いま若い人達でも、いろいろな分野において創意工夫に富んだ仕事をしている人達はたくさんいるわけですね。学問の分野でもそうだが、企業でも農業でも芸術の分野においてもそうだ。将来に夢を持たない、今の生活に張合いや生きがいを持たない若い人も多いが、それは我々の責任で、若い人達がそういう夢と生きがいを持つような社会をつくっていききたい。

ただ、政治家もあまりに身辺が忙し過ぎる。少なくとも総理や閣僚は、もつと時間的に余裕を持って、落着いて読書もし演劇も観るようにはしないとイケない。最近、革新政党を支持する文化人も多いようだが、総理や閣僚としては、そういう人達ともゆつくりと話合つて、国民は真に何を求めているのかを知り、そういう国民の希求にこたえらるとともに、将来の指針を引き出すような政治をしないとイケない。そこに私は、政治家としての重い役割があると思つのです。